



デジモンテイマーズ

第35話

その名はデュークモン！
真なる究極進化

第三稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2001／08／12

登場人物

- 松田 啓人「タカト」(10)
李 健良「ジェンリヤ」(10)
牧野 留姫「ルキ」(10)
加藤 樹莉(10)
塩田 博和(10)
北川 健太(10)
李 小春「シウチョン」(07)
秋山 遼(14)
- グラウモン メギドラモン
テリアモン ラピッドモン
キュウビモン
クルモン
レオモン
ロップモン
ベルゼブモン
マクラモン
スーツエーモン(声のみ)
サイバードラモン
- 李 鎮宇(40)……………ジェンの父親
李[^]柳瀬^v麻由美(42)……………ジェンの母
李 連杰「リンチェイ」(17)……………声無し
李 嘉玲「ジャアリン」(15)……………声無し
- 山木満雄(32)……………ネット管制室長
鳳 麗花(26)……………チーフ・オペレーター
小野寺恵(23)……………オペレーター

こちらに背を向け座り込んで、小春の服を畳んでいる麻由美。

麻由美「(背オフ)ちよつと待って。ね、小春にどの服送ったらいいかな。今香港で気温どうなの?」

鎮宇「(それどころではなく)聞こえたのか? 出かけてくるからなっ」

行こうとする鎮宇。

麻由美の声「(強く)待ってよ!」

止まる鎮宇。

麻由美「(涙を浮かべ)シウチョン、本当にあなたの御実家に行っているの? おかしいわよ、やつぱり。あたし、夢で見たもの……。あの子——、ジエンリヤと同じところに引っちゃったんでしょ?」

鎮宇「——(目を見る事が出来ない)——すまない……」

麻由美「何で? 何でウチの子ばかり!」

子ども部屋から覗き見るリンチエイとジャアリン。

鎮宇「——後でゆつくり、話す」

鎮宇、出ていく。

麻由美「今度っでいつよ!」

閉じられるドアの音。声を上げ泣く麻由美。

デジタル・ワールド/四聖獣の領域/南大門前

メギドラモン、胸のデジタル・ハザード・マークを皓々と赤く輝かせ、咆哮する。

ゴオオオオオ! 空が坩堝の粘液の如きにうねり、

デジタルな雷光が走る。

ズズズズズズ 地が震える。

小春「こわい!いいいいい!」

ロップモン、健気に小春を護ろうと脚を掴んでいる。

メギドラモン「ぐわおおおおおんんんんんん!」

満身創痍のキュウビモン、目を細めて見つめる。

キュウビモン「——あれが——ギルモンの究極体……」

方耳、方肩を壊したラピッドモンも見つめる。

ラピッドモン「ギルモンはウィルス種……。だけど、あんなにな
っちゃうなんて……」

そのPOV――。

ジェン「(ハツとDアークを見て)――メギドラモン……。ウィ
ルス種、究極体――、やっぱり究極体だ！」

呆然と見つめるタカト。

タカト「あれが、ギルモン？ 僕の――考えた――デジモン……」
メギドラモン「ぐおおおおおんんんんんん！」

メギドラモン、蛇状の尾をベルゼブモンに絡ませ、
動きを封じた上で――、頭から噛みつきこうとする！
必死にそれを腕で阻止するベルゼブモン。

ベルゼブモン「なっ、何だこいつは！ くそ！ 強過ぎる……」
ベルゼブモンの顔に滴るメギドラモンの唾液。酸性の様
に、ベルゼブモンの顔、躰を溶かす。

樹莉「――もう嫌だ！」

顔を覆う樹莉。

タカト「――加藤さん……」

タカト、再びメギドラモンを見上げる。

タカト「――僕が――、あいつを倒せ、あいつを消してしまえっ
って思ったから――ギルモンは――」

過呼吸気味になり、顔が青ざめるタカト。

ドドドオオオンンン！

地が割れていく！

留 姫「！ どうしたの……何が起こっているの……」

地に深い亀裂が入っていく！ 子ども達、別々の島
に離れていく。

メギドラモンのデジタル・ハザード・マークが激し
く明滅。

ジェン「ハザード・サイン――この進化は、デジタル・ワールド
そのものにまで危機をもたらすんだ！ あのマークはそ
ういう意味だったのか……」

小 春「ジェン兄ちゃん！」

ジェン「小春！」

ジェン、小春のいる島へジャンプ。

しかしそこはあまりに小さい島。徐々に周囲が崩れていく。

ジェン「し、しまった！」

キイイン！ ラピッドモン、方翼ながら急速接近し、ジェン、小春、ロップモンを拾い上げて、大きな島へ運ぶ。

ジェン「ラピッドモン！ 大丈夫！」

ラピッドモン「——まだまだ僕は負けないよ！」

都庁舎外観

ネット管理局／管制センター

ヒュプノスの画面がデジタル・ハザード・マークに埋め尽くされている。鳴り響く警報。

飛び込んでくる鎮宇。

鎮宇「何が起きている？」

山木「不明です。デジタル・ワールドの一番深いレイヤーで、強大なパワーが現れ、レイヤー自体を揺るがしているのです」

鎮宇「ジェンリヤ達は？」

山木「——（沈痛に被りを振り）連絡がとれません。多分、彼らの行動が関係しているのは間違いないでしょう」

鎮宇「（自分の額を拳で叩き）何故！ 何故今なのだ！ 世界の仲間と連携して、子ども達を救い出すアークを作っているところなのに！ 間に合わないなんて……」

山木「——私は彼らを信じます——。彼らはこれまで、大人の我々ではとても不可能な事をやってくれた」

鎮宇「そう、そうとも！ しかし、しかしこの異変は——」
禍々しい輝きのハザード・サイン。

物理レイヤーの荒野

サイバードラモンと共に旅を続けていたリョウ——

地表から無数に伸びる赤く細い光の筋。低い地鳴り。
リヨウ「何が起こってるんだ……？」

ハツと振り向くリヨウ。

数キロ程離れたところで、赤く太い光の筋が地下より頭上のリアル・ワールド球に向かって貫いている。

南大門前

メギドラモンの胸のハザードマークが明滅。

どンドン周囲の地を陥没させていく。

それでもメギドラモンはベルゼブモンを食らおうと覆い被さっていく！

タカト「もう——、もうやめてニギルモン！ もうやめるんだ！」

その声はメギドラモンには届かない。屈していくベルゼブモン。もう後は、地に伏し、メギドラモンに喰われるのを待つばかり。

ベルゼブモン「こいつは——、ただ俺を喰う為だけに生まれたの

か……。こんな奴に俺は……」

メギドラモン「ぐおおおおおんんん！」

その時——！ 淀む空に一閃の光。

ベルゼブモンのすぐ脇に、プラズマ球電が現れる。

その中にいるマクラモン。

マクラモン「何をしておるのだ！ こんな戦いを続けていたら、

この我らが神の領域のみならず、この世界そのものまでをも破滅させてしまうぞ！」

ベルゼブモン「う、うるせえ……」

マクラモン「愚かなるチャッラモンめ。こんな異常進化までさせ

て兵を造るなど——」

ベルゼブモン「うるせえって言うてんだらうが……！！」

ベルゼブモン、ぐっ、と腕を伸ばし、マクラモンを掴む。

マクラモン「なっ、何をする！ お前は神の力で進化させてもらっただけの、卑しいデジモンでしかないのだぞ！」

ベルゼブモン「——（ニヤ）」

ベルゼブモンの目が光り、口を大きく開いて叫ぶ！
ベルゼブモン「ぐあああああっっっ！」

掴まれたマクラモンの躰、量子分解していく！
マクラモン「神の使い、デーヴァを——、お前は……」

量子分解したデータを飲み込むベルゼブモン。

留 姫「（啞然）——デーヴァをロードした……」

キュウビモン「最早あれは、悪魔——」

キュウビモン、飛び立つ！

留 姫「キュウビモン！ 駄目！ そんな躰で——」

ラピッドモンも飛び立った。

ジェン「よせっ！ ラピッドモン！」

ラピッドモン「このまま戦いを続けたらこの世界が壊れちゃう！

だとしたら、あいつを止めなきゃいけないんだ！」

ジェン「——」

留 姫「（強い顔になって）——そう、そうなんだよね！」

カード・スラッシュ

留 姫「カードスラッシュ！ マトリックス・エボリューション

！」

タオモン進化

キュウビモン「キュウビモン進化！ タオモン！」

南大門前

マクラモンをロードし、身を震わせているベルゼブモン。メギドラモンはベルゼブモンを仰向けに押し倒し、噛みつかんとしている。

そこに飛来してくるキュウビモンとラピッドモン。

ラピッドモン「ゴールドデン・トライアングル！」

タオモン「梵・筆・閃！」

見上げたベルゼブモン——、指をガツと開く！
マクラモンを運んできた青い光の筋が掌から伸びて
ラピッドモン、タオモンを捕える！

ジェン「あいつはマクラモンをロードしている！ その力を
自分で使えるんだ！ 逃げるラピッドモン！」

ラピッドモン「に、逃げられない——」
タオモン「オン（＝梵字！）」

タオモン、九字を切り自己の周囲に曼陀羅円を描く
くが——、腐食する様に消えてしまう。

ベルゼブモン「お前らも喰ってやる！ 喰って喰って、俺は最強
のデジモンになるんだああっ！」

青い光に捕らえられたラピッドモンとタオモン、躰
の周囲が量子分解を始める。

留 姫「タオモン！！！」

ジェン「このままじゃロードされちまう！ くそ——、（ハッ）」
カードを一枚抜くジェン。

ジェン「留姫！ エイリアスのカード！」

留 姫「えっ？ 分身——？（得心しハツとなり）」
腰のカードホルダーからサツと束を抜いて——

カード・スラッシュ

ジェン+留姫「カード・スラッシュ！ エイリアス！」

南大門前

青い光の中のラピッドモンとタオモン——、すつ、
とそれぞれテリアモンとレナモンの分身が生まれ、
離脱。

しかしラピッドモンとタオモンは完全に量子分解し、
ベルゼブモンに喰われていく。

落下する二体。

テリアモン「ふー……、助かったけど……」

レナモン「完全体の力、全て奴に……」

ベルゼブモン「うがあああああああああああつっつっつっつっ！」

全身を激しく震わせ、躰にアウラが包み――、
ぐっ、メギドラモンの顎を掴んで――、立ち上がる
ベルゼブモン！

タカト「――」

呆然と見つめるばかりのタカト――。

ベルゼブモン「がっがっがあああああっ！」

躰の中に制御しきれない程のパワーを溜め込んだベルゼブモン、時折、不自然な痙攣を起こしている。
グワツツツ！ 体内からラピッドモンの腕が！
タオモンの肩ウイングが！――突き出るも無理矢理
押さえ込むベルゼブモン――

ベルゼブモン「うぐう……ウガアアアアア！」

立ちはだかるベルゼブモン！

ガン！ ガン！ ガン！

拳でメギドラモンの頭部を強打。

メギドラモン「ぐおおおんんんんんん」

樹 莉「やめてええええ二 やめてよオオオオオ二二二」

ベルゼブモン「うがががががっ！」

ゲシツツツツ！ 俊敏に後ろ回し蹴りでメギドラモンのハザード・マークを撃打！ ビシッ！ ハザード・マークが割れ――、

メギドラモン「おおおんんんんんん――」

ズズーン！ 地に伏す、メギドラモン。

ベルゼブモン、昂奮の余り、身を震わせ、首をガクンガクンと振りながら咆哮。

ベルゼブモン「ああああつぐっ！ ぐあつ！ あああああつ！」

慄然とそれを見つめる、ジェン、テリアモン――

留姫とレナモン――、

小春とロツプモン――、

ヒロカズ、ケンタとガードロモン——。

ヒロカズ「——ほんとにあいつ——、最強のデジモンになったのかよ……」

そして、タカトと樹莉、やや離れて立ち尽くす。

タカト「——（樹莉に向いて）——加藤、さん……」

無意識に後退る樹莉。

樹莉「——もう、もうやめて、こんな事、こんな——」

ポロポロと泣きだす樹莉。

タカト「——僕だって——、こんな戦い——」

近づこうとするタカト。

樹莉「来ないで——！」

タカト「（衝撃）」

樹莉「ギルモンちゃんを——、あんなに可愛かったギルモンち

ゃんが……」

タカト「（より強い衝撃）」

タカト、力無く、目を閉じ、地に伏せているメギド
ラモンの方を見る。

ネット監視センター

ヒュプノスのスクリーン、ハザードマークが徐々に
消えていく。

恵 「ネットワーク最深部レイヤーの異常、停止した模様です」

小さく溜め息をつく鎮宇。

鎮宇「——助かった、のだろうか……」

山木「——（スクリーンを見上げ）何が起こっているのかすらも判らない——。こんな物を作って有頂天になっていた自分があまりに愚かしい……」

鎮宇「——これからさ。これからだよ、山木君」

山木「（内省）……。ワイルド・バンチの皆さんが作っておられるアーク、方舟はあとどれくらいで完成するのですか」

鎮宇「基本設計はもう出来ている。しかし計算が膨大で——」

山木「ヒュプノスのメインフレームを使って下さい」

鎮宇「——ありがとう……。急がねばならない。あの子達はお

そらく、自分達も知らず、この世界を救おうとしているのかもしれない……」

南大門前

破壊された南大門の脇で、がくりと膝をつき、頭を垂れているベルゼブモン……。時折震えが全身に走る。体内のパワーを御しきれない。ヒロカズらとジエン、同じ島に集まろうと手を伸ばし合っている。

タカトは――、おそろおそろ、伏しているメギドラモンの頭部の前へ来る。

タカト「――メギ、ドラモン……」

答えないメギドラモン。

タカト、膝をついて、そっとメギドラモンの閉じた目の前に。

タカト「――僕が――、いけなかったんだ……。全部、僕が……」

以下、タカトの台詞に合わせて適宜フラッシュ。

タカト「（淡々と）僕は――デジモンがとっても好きで――、ネットの中とか、カードの中だけじゃなくて、ホントに僕と一緒に遊んだり出来たらとっても楽しいのにつて、ずっと思ってた――」

ギルモンとの出会い

学校でのギルモン騒動

公園脇を歩くタカトとギルモン

タカト「だから――、ホントに夢がかなったっていうか、僕がそうなって欲しい事が魔法みたいに起こって……」

グラウモンに進化するギルモン

ちびっこ広場の滑り台の上のタカトとギルモン

タカト「――でも、デジモンはデータ……」

SHIBUMI 図書館にて、タカトの前に現れるもう一

体のギルモン。

それを慄然と見ているタカト。

タカト「魔法なんかじゃなかった……」

タカトに笑いかけているギルモン

タカト「(唇を噛む)」

メギドラモンの目は閉じられたまま――。

ヒロカズとケンタ、樹莉に呼びかけている。

ケンタ「加藤！ ねえ加藤ってば！ こっちに来なよ！ 危ない

ってばそこに一人じゃ」

しかし樹莉は心を喪いつつあり、反応しない。

ぎゅっ、と両手でレオモンとの絆――Dアークを握

りしめている。

ヒロカズ「しょうがねーな。まあ無理ないけど……。俺、連れて

くる！」

ヒロカズ、地の亀裂をジャンプしようとして後退する。

と！ その時！

ベルゼブモンの唸り「うううううううううううあああああああっ！」

ヒロカズ「(よろけて)」

ベルゼブモン、ユラリと立ち上がった！

ベルゼブモン「うぐうおおおおっ！ おおおおおおっっ！」

全身に力を漲らせ、奮い立つ。

ベルゼブモン「俺は――俺は勝った！ 俺は最強のデジモンにな

ったんだああっ！」

ジェン「まずい、あいつはタオモン達のデータも自分のものにし

てしまったらしい！」

テリアモン「なんて奴！」

小春「ロップモン、進化してあいつやつつけて」

ロップモン「(困り顔) 我、進化はもう許されない……」

小春「だって、だってみんな危ないんだよ！」

ジェン「小春！ ロップモンに無理を言うな！」

小春「(泣きだす) だってーっ！ ええーん、ええーん」

「しまった」と頭をかきむしるジェン。

留 姫「(屈んで) 小春、大丈夫。みんなもいるよ。レナモンや

テリアモン、ガードロモン、みんな、まだあたしたちと

一緒」

小春「ええーん！ ええええーん！」

ケンタ「あいつ！」

ベルゼブモン、ゆっくりとジエン達の方を見る。

ベルゼブモン「神なんてもう俺には関係ねえが——、契約は契約だ。お前達人間も喰ってやるぜ——。俺はもう、神ではなく悪魔になってるんだ」

歩きだすベルゼブモン。

ジャキツ！ 両腕に銃が装着される。

小春「うわあああん！ ええええんん！」

激しく泣く小春。

ジエン、小春とロップモンを後ろに回し——

ジエン「くそっ！」

留姫、ハツとタカトの方を見る。

留姫「タカト！ タカト！ 何してんの？ 逃げて！」

感情を喪い、立ち尽くす樹莉——。

留姫「樹莉！」

ズズーン！ 足音を立て、こちらに向かってくるベルゼブモン。

タカトは——、背後に構わず

タカト「——（違うと首を振り）こんなの、こんなの間違ってるよ！ だって、だっていくら元がデータだからって、僕が考えたデジモンだって——、ギルモンはギルモンだもの！ 僕たち、ずっと友達だった！ ずっと一緒に遊んで、話して、笑って——、戦ってきた！」

ベルゼブモン、脇を見やる。

ベルゼブモン「胸くそ悪い奴め、まだそこにいやがったか。まずは貴様からだ」

メギドラモンの頭に抱きつくタカト。

タカト「（聞こえていない）——ギルモオオオオオン！！！」

タカトの呼びかけ、この世界中に染み渡る。

メギドラモンの閉じられた瞼が、ゆっくりと開く。

未だ赤黒い輝きだけの眼——。

ベルゼブモン「消えっちまえっ！」

ジャキ！ 両手の銃口をタカトもろともメギドラモンに向けるベルゼブモン。

口々に（クロストーク）

ジェン「タカト！ 逃げる！ そこから離れる！」

留 姫「何してんのタカト！ 早く！ 早く逃げて早く！」

ヒロカズ「タカト！ バカヤロオオオオ！」

テリアモン「タカトーっ！ タカトーっ！」

彼らの声——、低く、極端にゆっくりに——

ド・ツツゴオオオオオオオオ

発射される銃弾。スローモーション——。

否、時間が、タカトの時間の進行が停止していく。虚空を停止しているかの様にゆっくりと進む銃弾。タカトに向かって叫んでいる子ども達——。

赤い眼がタカトを見つめている。

タカト「——ギルモン——、僕の友達——」

メギドラモンの眼——、赤から——、黄色に変わり——、瞳が現れる。

メギドラモン「（くぐもった声）タ……カ……ト……」

タカト「ギルモオオオン！」

弾丸は止まっていない。ゆっくりとはあるが、タカト達の方に向かって突き進んでくる！

ベルゼブモン「（超低速声）うええええおおおっっ！」

タカトの部屋（リアル・ワールド／過去時制）

ポツン、と部屋の真ん中に立っているタカト。

壁に貼られた、アグモンのポスター！

「何故僕は今、ここでこれを見てるんだらう……？」

しかしタカト、アグモンを見ている内に笑顔になつて——、自分の机に駆け寄って座り——メモ帳に描き出す。

彼自身の、彼が自分で考える、デジモンの絵。熱中して描いていたタカト——ふっ、と色鉛筆を止める。

タカト「——僕だって、データなんだ……。だって、デジタル・ワールドにいるんだよ、僕……」

涙が、零れてくる。涙が、ギルモンの絵に落ちて、滲む。

タカト「——、僕がギルモンと一緒に過ごしてきた時間は、絶対にリアルだった——。僕たちが一緒に感じた気持ち、は、本物だった……」

ややあつて——

ギルモンの声「——そうだよ、タカト——。僕たちは、ずっと、友だち——」

タカト「……」

ハツと顔を上げるタカトの眼前に——グオオオオオオオッ！ 赤と黒がマーブル状に混ざった、力強い光球——、恒星の誕生の如く輝き、タカトに迫って——

『ギルモン・クエイサー』内

グオオオオオオオッ！ 赤と黒のヴォルテクス。それは、巨大なデータとエネルギーの塊となったメギドラモンの内部。

その中心に呆然と立つタカト——タカト「——（深呼吸）——ギルモオオオン！」

ドオオツツツ！

ヴォルテクスが無数のパーティクルに変化し——タカト「！」

ギル ギル ギル ギル ギル ギル——ギルモン達。何百もの、ギルモン達。生まれたての

ギルモン達が無数にそこにいる。

ギル ギル ギル ギル——

タカトに無関心に歩き回るギルモン達。

その中でタカトは——

タカト「ギ、ギルモンが、いっぱい……。 (力強く首を振り)

違う！ 僕のギルモンは、たった一人！ どんなにデー
タで増えたって、ギルモンは、僕と一緒にいたギルモン
はたった一人しかいないんだあああああつ！」

タカトの叫び——。それに呼応して——、ふつ、と

タカトの眼前に一本の赤い道（七話参照）が浮かぶ。

タカト「！」

その道の先に、ぐったりと横になっているギルモン
がいる！

タカト「ギルモン！ ギルモオオオオン！」

駆けだすタカト。

無数のギルモンの脇を駆け抜けていく。タカトが通
過している毎に他のギルモン達は量子分解していく。

タカト「ギルモンギルモンギルモンギルモオオオン！」

横たわっていたギルモン、耳を立て——、眼を開
けて——

ギルモン「タカト……？」

南大門前

タカトの叫び「ギルモオオオオン！」

タカトは、ギルモンを、小さいギルモン、それでも
タカトの躰よりは大きい——の頭を抱いていた。

タカト「——ギルモン……」

ギルモン「—— (力無く、しかし笑んで) ぼくはここにいるよ」
タカト「…… (嬉し涙) うん、うん……、いてくれて、ありがとう
う、ギルモン……」

と——、無音の場であったそこに——、徐々に、極

低の『音』が帰ってくる——。

ハツと振り向くタカト。

向こうに立つベルゼブモン。

そして——、こちらに向かってくる無数の弾丸。
その微速な進行が——、元に戻りつつある！

留 姫「（リアルタイム）タカトオオオオ！」

ギルモンの眼、強い光になって——

ブン！ 幻の様な、不明確な巨大なメギドラモンの
尾が振り下ろされ——、銃弾を弾き飛ばす。

立ち上がるギルモン。

ギルモンの躰の周囲には、未だ、あの巨大な究極の
姿のパワーが留まっていた。

ギルモン「——タカト、一緒に戦おう」

タカト「一緒に……。そう、いつだってそうだった。そうだよね
ギルモン！」

苦渋の顔のベルゼブモン。

ベルゼブモン「くっ！ そんなにこの爪で引き裂かれたいかよ！
鋭い爪をガツと開く。」

タカト「——でも、どうしたら一緒に戦える？ ギルモンと一緒に
戦うって、どうやって？」

ギルモン「ギルモン判んないけど、でも、タカトと一緒になるっ
て思えば、きつとなれるよ！」

タカト「——僕は、もうギルモンの後ろにいるんじゃない！
ブン！」

タカトの躰の周囲を半透明の球体が包む。同時にデ
ジタルテックな帯がタカトを包む球内に走る。

タカト「ギルモン！ 本当の！ 本物の究極進化！」

デュークモン進化

ギルモンの躰——、力強いパワーに満ち——、
成熟期、完全体の姿が重なって——

タカト自身がその姿に重なり——

ギルモン「——ギルモン進化アーツ！」

その姿、真なる究極の姿へ——。
デュークモン「デュークモン！！！」

南大門前

嘩然と見つめる子どもたち、デジモンたち。

ジェン「——あれが——、本当の、究極進化の姿……」

留 姫「（呟く）タカトは……？ タカトはどこに……？」

立ち上がる——、龍騎士・デュークモン。

すつ、とグラムを横に振る。

ベルゼブモン「（嘩然）——な、何だ手前は……」

デュークモン「——ベルゼブモン、悪魔に魂を売り、自ら悪魔と

なった者——。絶対に許す訳にはいかない！」

ベルゼブモン「——（憤怒）許せねえだ…… 俺自身の存在を、

許せねえだ…… そんな台詞は——」

ダッ！ ダッシュするベルゼブモン！

ベルゼブモン「俺を倒してからほざけッッッ！」

デュークモン、サツとグラムを振り上げて構え——、

ベルゼブモンに向かって駈けだす！

ベルゼブモン「ああああああああっ！」

デュークモン「うおおおおおおおっ！」

激突！

以下次回